

## 1 地域及び研究指定校の特色等と研究の動機

本校が位置する吉和地域は山口・島根両県境に位置し、中国山地の標高 600m の積雪寒冷地帯に属し、農業や林業のほか、都市との交流を目的とした自然体験施設やスキー場、美術館等の文化施設がある。世帯数 337 世帯、人口 618 人（R2）の過疎化が進んでいる地域であるが、子ども達への期待は大きく、青少年の健全育成にも意欲的な地域である。また、本校は、平成 21 年度より施設一体型の小中一貫教育を開始し、今年で 12 年目を迎える。児童生徒 45 名（R2）の小規模校であり、2 級地のへき地校である。運動会や文化祭等の地域行事に参画する機会が多く、地域の教育力に支えられている。

しかし、その吉和地域の人口は、1 年で 7 人減って 611 人（R3.9.1 現在）であり、その半数は高齢者が占める。その高齢者の 1/3、100 人強が一人暮らしという状況となっている。その中で、10 年で 100 人くらいずつ減るという試算も出ている。これを受けて私たちは、「10 年、20 年後の吉和小・中学校、吉和地域は大丈夫なのだろうか。」という問題意識をもった。そもそも「SDGs」（SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS）も、2030 年の地球において持続可能な経済・社会・環境づくりのために始まったものである。この視点を現在の吉和小・中学校及び吉和地域にも当てはめながら教育課程を見直していくことが必要不可欠と考え、研究に取り組むこととした。

## 2 研究主題設定の理由および吉和の課題

本校の学校教育目標とめざす児童生徒像は、次のとおりである。

〈学校教育目標〉

夢や目標をもち、果敢に挑戦し、自己実現する児童生徒の育成

〈目指す児童生徒像〉

考えをもち、はっきりと表現することができる児童生徒。

本校は、平成 21 年から施設一体型小中一貫校として教育活動を行ってきたが、少人数の小規模校であるため、保育園から小・中学校の 12 年間でほぼ同じメンバーで過ごす固定された社会集団、学習環境であることから、コミュニケーション能力やソーシャルスキルの育成に課題がある。

### （1）本校の児童生徒につけたい資質・能力

本校の児童生徒につけたい資質・能力は、次の三つである。

①主体的に学ぶ力 ②説明力 ③人間関係形成力

これは、平成29年に当時の児童生徒と教職員に吉和の児童生徒の課題調査を行い、その結果

- ①小中一貫の小規模校のため、児童生徒が自主的、主体的に学習や活動に向かう姿勢が弱い。
- ②小グループ内では発言ができるものの不特定多数の前で発表することが苦手な生徒が多い。
- ③多くの生徒が保育所から同じメンバーで特定の間関係の中でしか生活したことがなく、コミュニケーション能力が低い。

という課題が明らかになったことにより、この三つの力が設定された。また、同時に「児童生徒につけさせたい資質・能力の系統表」を作成し、継続的に取り組んできた。

	小学校 1,2年	小学校 3,4年	小学校 5,6年	中学校
主体的に学ぶ力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題に興味をもって取り組むことができる。</li> <li>・課題解決に向けてあきらめずに、取り組む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分で課題を見つけ、見通しを立てて解決の方法を考えることができる。</li> <li>・課題解決に向けてあきらめずに、粘り強く取り組む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今までの学習を生かしながら課題を設定し、解決の方法を考えることができる。</li> <li>・課題解決に向けて、他の人の意見を聞いて修正しながら、粘り強く取り組む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今までの学習を生かしながら課題を設定し、それに達した解決方法を考えることができる。</li> <li>・課題解決に向けて、情報を整理・分析しながら粘り強く取り組み、学習したことをさらに今後の学習に生かすことができる。</li> </ul>
説明力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えを、順序を考えて表現できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えに理由をつけて、説明できる。</li> <li>・他の人の考えを聞いて、それに答えることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の意見を、その理由や根拠を明確にして表現できる。</li> <li>・自分の意見と他者の意見を比べたり関連付けたりして表現できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の意見を目的に沿って筋道を立てて、理由や根拠を明確にして表現できる。</li> <li>・自分の意見と他者の意見を比べて、まとめたり修正したりして表現できる。</li> </ul>
人間関係形成力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達の良いところを見つけられる。</li> <li>・友達と協力して学習や活動ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達の良いところを見つけ、認めることができる。</li> <li>・友達の考えを聞きながら、協力して学習や活動ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の立場に立って考え、良いところを認めたり、アドバイスしたりできる。</li> <li>・集団活動に進んで参加し、自分と違う意見も聞きながら、協力して学習や活動ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の立場に立って考え、良いところを認め、改善できることは指摘して、お互いが高め合っている。</li> <li>・集団活動に積極的に参加し、自分の役割や責任を果たしながら、協力して学習や活動ができる。</li> </ul>

この課題は、吉和地域の特性によるものが多く、すぐに解決できるものではないものの、現在の児童生徒にも同様の課題があると考え、「主体的に学ぶ力」「説明力」「人間関係形成力」を継続させている。

## (2) 研究主題

本校は、これまで総合的な学習の時間を中心に、吉和地域と連携した様々な学習を進めてきた。本研究では、総合的な学習の時間を各教科等で身に付けた資質・能力を活用・発揮する場（説明の場）として位置づける。また、総合的な学習の時間をSDGsの視点で見直し、行政、地元企業、福祉施設や教育機関等と共に吉和の未来を考えていく教育課程を編成する。また、これを踏まえて他の教科・領域の教育課程を見直したいと考えている。

これからの情報化やグローバル化等の社会の急激な変化に伴い、教育内容の量的・質的充実への対応が求められている点から、地域の教育資源を活用した教科横断的な総合的な学習の時間（課題発見・解決学習）を中心に他の教科・領域とも連動して教育実践を重ねることで、児童生徒の説明力を高めるとともに、吉和の持続可能な社会（地域）をつくる担い手の育成につながると考え、本研究主題を次のように設定した。

### 【研究主題】

「考えをもち、はっきり表現する児童生徒の育成  
～SDGsの視点をふまえた教育課程の編成と説明力を高める指導法の工夫～

### 3 研究仮説

本校の「資質・能力」から見た学校・生徒の実態と課題は次のとおりである。

- ① 総合的な学習の時間を中心に吉和地域の関係機関等と連携し、社会とのつながりを意識した学習の実施が有効。〈継続的に実施〉
- ② 小学校36人、中学校15人、合計51人の小規模校の特性を活かす。  
〈施設一体型の小中一貫校〉
- ③ コミュニケーション能力やソーシャルスキルの育成に課題。〈「表現力＝説明力」に課題〉

この状況を踏まえ、本校の「目指す生徒像」を「自らの考えをもち、はっきりと表現することができる児童生徒」とし、その達成には「説明力」をつけることが不可欠と考えた。

そこで、本校では、「説明力」を次のように定義し、これまで行ってきた教育実践を見直し、新たな取り組みをすることにした。

〈説明力〉の定義：自分の意見を目的や場面に応じ、理由や根拠を明確にして表現できる力

そのスタートにあたっては、広島大学大学院の吉賀忠雄准教授を講師として、リモートで校内研修を行い、「めあてと振り返りのある授業」、「授業の振り返りをキーワード使って自分の言葉で説明する授業」の二つで取り組んでいくこととした。

今回、児童生徒の付けたい力とした「説明力」の意義は次のように考えた。

〈「説明力」の意義〉

- ① 学習者の理解度（キーワードが使えているか）が明らかになり、事後の指導がしやすくなる。
- ② 学習者の言葉で表現させることで「自分事」になる。
- ③ 学習者が目的や場面に応じて、理由や根拠を明確にして表現することで、コミュニケーション能力が向上する。

説明力の前提になることは、

- ①自らの考えをもつこと。
- ②自らの考えを、状況を踏まえて他に伝えること。
- ③自らの考えに対する他者の考えを受け止め、より考えを深めること。

の三つである。

そして、本校がこれまで取り組んできた「地域の教育資源の活用」や「地域連携」を更に充実すると共に、その取組を「SDGsの視点」で改善することが、「説明力の前提」につながると考え、以下のような研究仮説を設定した。

**【研究仮説】**

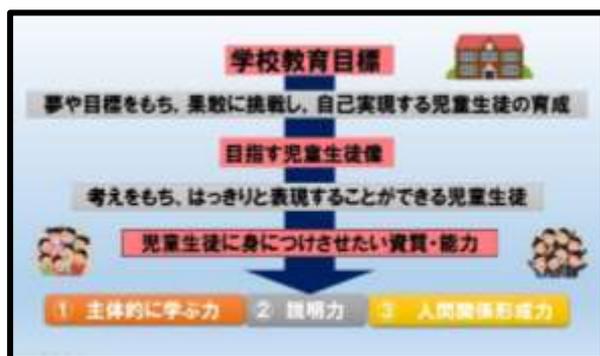
へき地・小規模校という本校の特徴を活かし、

- ①総合的な学習の時間を中心に据えたSDGsの視点による教育課程の見直し
- ②全教科・全領域での説明力を高める指導方法の工夫
- ③「SDGs」を共通キーワードとした学校と地域の方々が相互に学び合える取組〈地域連携〉

をすれば、

「考えをもち、はっきりと表現することができる児童生徒が育成できるであろう。」

(本校の目指す児童生徒像)



4 研究計画

	実施時期	研究内容, 研究方法, 成果の公開等	期待される成果等
令和二年度(一年次)	一学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究主題と研究内容, 研究計画等の協議と共通理解</li> <li>・総合的な学習の時間及び生活科の学習内容及び各教科との関連を意識した実施計画作成に向けた研修の実施</li> <li>・評価指標と調査内容の確認</li> <li>・地域企業との連携</li> <li>・研究授業の実施(講師招聘)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員の研究内容の確認と共通認識</li> <li>・各教科との関連を意識した授業実施</li> <li>・地域における教育資源の収集</li> <li>・説明力の向上を図る指導法の開発</li> </ul>
	二学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地元企業との連携による体験的な学習の実施</li> <li>・全国学力状況調査の分析及び指導法改善の検討</li> <li>・研究授業の実施(講師招聘)</li> <li>・地域公開(中間発表) 地域・保護者アンケート実施</li> <li>・児童生徒による地域, 保護者への提案</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題設定と解決学習の見通しの確認</li> <li>・授業内容の検討及び改善</li> <li>・授業改善の共通認識</li> <li>・説明力の向上を図る指導法の開発</li> <li>・評価指標を踏まえた改善</li> </ul>
	三学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地元企業との連携による体験的な学習の実施</li> <li>・研究授業の実施(講師招聘)</li> <li>・評価指標を踏まえた次年度に向けた計画及び検討</li> <li>・来年度に向けた生徒による校内の取組提案</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題設定と解決学習の見通しの確認</li> <li>・授業内容の検討及び改善</li> </ul>

			<ul style="list-style-type: none"> <li>・説明力の向上を図る指導法の開発</li> <li>・次年度へ向けた研究構想の共通認識</li> <li>・児童生徒会と連携した取組</li> </ul>
令和三年度（二年次）	一学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究1年次の課題を踏まえた計画の修正協議</li> <li>・研究紀要の作成計画と作成</li> <li>・地元企業との連携による体験的な学習の実施</li> <li>・研究授業の実施（講師招聘）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員の研究内容の確認と共通認識</li> <li>・課題設定と解決学習の見通しの確認</li> <li>・授業内容の検討及び改善</li> <li>・授業改善の共通認識</li> </ul>
	二学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究会に向けた模擬授業の実施と改善（講師招聘）</li> <li>・全国学力状況調査の分析と指導法改善の検討</li> <li>・地域、保護者、児童生徒、教職員の評価指標における検証と分析</li> <li>・児童生徒による地域、保護者への提案</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・説明力の向上を図る指導法の開発</li> <li>・授業改善の共通認識</li> <li>・研究における成果と課題の共有</li> </ul>
	三学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究2か年の成果と課題</li> <li>・次年度へ向けた研究の方向性の協議</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・説明力及び思考力の向上に係る検証</li> <li>・次年度の研究の方向性と共通認識</li> </ul>

## 5 研究内容及び具体的な研究活動

### (1) 令和2年度

#### ア 研究内容

- ①教育課程の編成
- ②「説明力」の育成
- ③地域連携

#### イ 具体的な研究活動

##### ①教育課程の編成

総合的な学習の時間を中心に据えたSDGsの視点による教育課程の見直し

(ア) 校内研修を行い「SDGs」の教職員の理解を深めた。

- ・ SDGsの一般理論研修、「『SDGs』のカードゲーム」による体験型研修
- ・ SDGsの視点による教育計画の見直し

(イ) SDGsの視点による地域の教育資源を生かした教育課程の見直し

- ・ SDGsの視点で教育課程を見直し、総合的な学習の時間では、「吉和の未来を考える」をメインテーマに学習を行った。小学1・2年生では総合的な学習の時間がないので、生活科の時間にこれまで行っていた授業をSDGsの視点で見直して授業実践を行った。

## ②「説明力」の育成

全教科・全領域での説明力を高める指導方法の工夫

### (7) 「説明力」を高める指導方法の校内研修

- ・ 『説明力』とは何か。」「説明力を高める授業の在り方」の理論研修

### (4) 定期的に校内研修や校内でお互いの授業を見合う「授業参観週間」の実施

- ・ 計画的に研究授業を行い、「説明力」を高める授業や効果的な「めあて」と「振り返り」のある授業，意見発表や表現活動の場を意図的に作り，活動場面を多くする授業など，「説明力」を高めるための授業改善について検討した。

## ③地域連携

「SDGs」を共通のキーワードとした学校と地域の方々が相互に学び合える取組

- ・ 「吉和の未来を考える」をテーマに，総合的な学習の時間を使って，吉和地域の SDGs の認知度や取組実態を調べ，そこで見つけた課題を整理し，提言を行った。

## ウ 児童生徒の活動状況

- ・ 小学校では，外部講師を招聘しての「自然環境と生き物の関係」などを学んだ後に行った水中生物の調査・検証を行った。



- ・ 中学校では1・2年生が吉和地域の「SDGs」の認識調査やそれに関連した取組調査を行い，3年生では「SDGs」の学習を行った後にユニタール広島事務所（1965年に設立された国連訓練調査研究所の広島事務所。広島という象徴的な都市に設立された最初の国連機関で，主に紛争後の復興や世界遺産，安全保障に関する研修を実施している。）とリモート研修を行い，世界や特に日本のSDGsの取組の現状と課題について学習した。



- ・ 2学期は，各学年とも1学期に学習したことを基に，SDGsの視点で見た吉和地域の現状と課題から「吉和地域への提言」としてのまとめ，地域参観日での発表で発表し，発信することができた。日々の授業だけでなく，発表の場を多く設けることで，本校の課題である「説明力」の向上を図ると共に，「説明力」を見取る場とした。



- ・ 「吉和やまびこ太鼓」の活動も行い、地域の伝統を守り伝えていくと共に、地域をつなぐ活動を行った。
- ・ 「福祉プロジェクト」として、小学3年生から中学2年生までは、総合的な学習の時間で広島市や吉和地域の社会福祉センターと連携して、車いすやブラインドウォークなどの高齢者・障害者の疑似体験や障害者スポーツ「ボッチャ」体験を行い、高齢者や障害を持った方への理解を深め、交流していく活動を行った。



## (2) 令和3年度

### ア 研究内容

令和2年度の実践の成果と課題を整理し、令和3年度は以下のように取り組むこととした。

- ① 総合的な学習の時間を中心にすえたSDGsの視点による教育課程の見直し
  - ・ SDGsの視点で教育課程を見直すことにより、単元学習やカリキュラムマネジメントなどの教科や教科の枠を超えた主体的・対話的で深い学びを実現する。
- ② 全教科・全領域での説明力を高める指導方法の工夫
  - ・ 生徒一人一人の「説明力」向上についての指導方法（ICTの活用も含む）の検討を行い、全ての教科・領域においてに取り組み、授業力の向上を図る。
- ③ 総合的な学習の時間を中心に「SDGs」を共通キーワードとして学校と地域の方々が相互に学び合える取組
  - ・ 総合的な学習の時間だけでなく、「SDGs」を共通のキーワードとした地域連携の視点で検討を行い、保護者や地域との一層の連携を推進する。

なお、この研究に取り組むために以下のような方向性と共通認識を確認した。

- 総合的な学習の時間を各教科で身につけた資質・能力を活用・発揮する場（説明する場）として位置付ける。
- 各教科等をはじめとした全ての教育活動において、「説明力」を高める指導方法の工夫により思考力を高める。（検証方法：CRT等による活用問題の分析）
- 各教科等における見方・考え方を総合的に活用して実社会・実生活の課題を探求するこ

とで課題解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を高める。具体的には、持続可能な地域（吉和）づくりに向け、SDGsの視点を踏まえた提言をまとめ、発信することを通して、地域に誇りを持ち、地域づくりの担い手としての自覚をもたせる。さらに、持続可能な社会を築くために異年齢交流や他地域交流を行うことにより、多様な考え方に触れ、グローバル社会で生き抜くための資質・能力を高めることを重視する。

## イ 具体的な研究活動

### ① 総合的な学習の時間を中心にすえたSDGsの視点による教育課程の見直し

- ・小3～中1のグループと中2・3のグループの大きく二つに分かれて、「吉和の未来を考える」をテーマに授業に取り組んだ。

#### (ア) 小3～中1のグループ

- ・小3～中1・・・「お年寄りが住みやすいまちづくり」の取組と提言
  - 「吉和に住むお年寄りの住みやすいまちをつくろう。」をテーマに、お年寄りとのつながりや交流の場をつくる取組を提案する。
- ・小3～中1・・・「若い人が住みたくなるまちづくり」の取組と提言
  - 吉和に住む若い人にとって住み良い町にするための提案をする。
  - 吉和に移住する人を増やすための吉和のいいところを紹介する。
  - 吉和に関わってくれる人を増やすための吉和の観光スポットや特産物の紹介をする。

#### (イ) 中2・3のグループ

- ・中2・3・・・「持続可能な吉和のまちづくり」に向けた取組と提言
  - 昨年度行った「提言」を基に、自分たちが「吉和の未来のため」に行った取組や課題解決のための提言を発表する。

### ② 全教科・全領域での説明力を高める指導方法の工夫

#### (ア) 理論研修

昨年度に引き続き、広島大学大学院吉賀忠雄准教授の指導の下、

- ① めあてに対応した振り返り（まとめ） ←毎時間行う
- ② 学習方法や態度・意欲・他者との関わり等に関する振り返り（要所・まとめ）  
←必要に応じて行う
- ③ 授業のキーワードを使ってまとめを行い、児童生徒の言葉による表現  
←話したり書いたりする

を行い、コミュニケーション能力と学力の向上を図った。

#### (イ) 研修・授業参観週間を踏まえた「説明力を高める授業の在り方」の検討

研修及び昨年度からの授業参観週間における検討を踏まえて、「説明力を高める授業の在り方」について検討し、以下のように整理した。

・授業の流れの研修

「めあて」は、教師が児童生徒にこの1時間で学習させたいことを、児童生徒に見通しをもたせるために示すもので、この1時間で何をすれば（できれば）よいのかがわかる振り返り可能な表現にすることが大切になる。

「振り返り」には二種類あり、授業ごとに行う「毎時間の振り返り」と、単元の終わりや単元の要所ごとに行う「まとめの振り返り」がある。最初の「毎時間の振り返り」は「めあて」に対応した振り返り・まとめを毎時間行わなければならない。

「まとめの振り返り」は、授業者が必要に応じて学習方法や態度・意欲・他者との関わり等に関する評価のために行う「要所の振り返り」と単元の最後にまとめとして行う「まとめの振り返り」の二つがある。これら二つの振り返りとも、教科や授業でのキーワードを使った言葉や文字によるまとめ表現しなければならない。



この学習活動を整理し、まとめたものが「よしわ学びのサイクル」で、この学びを継続して取り組むことで「説明力」が向上し、それに伴って、「主体的な学び」や「人間関係形成力」も育成されていくと考えている。

・よりよい授業とするための単元構想シート・ワークシート等の工夫

「単元構想シート」は、新学習指導要領の改訂により、従来の評価の観点が、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学びに向かう態度」の3観点に変更になった。そのため、「めあて」や「振り返り」の観点も変わるので、「振り返りシート」の評価内容も変更した。また、本年度から「単元構想シート」を活用した授業づくりが奨励されたこともあり、できるところから「単元構想シート」を使った単元計画を行い、「指導と評価の一体化」に基づいた「評価計画」、「めあてと振り返りが連動する授業づくり」を行うこととした。

「振り返りシート」も新しい観点が見取れるものを工夫し、毎時間の「授業振り返りシート」は、最後の振り返りのところを「主体的な学びに向かう態度」を見取る「評価材」とするために、「達成感・粘り強さ」や「生徒の学習の調整」を書くようにした。また、「単元

の振り返りのワークシート」では、生徒の「自らの学習の調整や粘り強さ」を質問した後、次への意欲「主体的に学びに取り組む態度」を書かせている。

- ③ 「SDGs」を共通キーワードとして学校と地域の方々が相互に学び合える取組
- ・ 昨年度に引き続き、「吉和の未来」のために SDGs の視点から見た課題解決の取組を多くの事業所や団体と協力して行った。

① 吉和郵便局	② 吉和警察署
③ よしわ有機農園	④ 梶広建設
⑤ ウッドワン美術館	⑥ 吉和建設
⑦ エレファント・スイーツ	⑧ ミントハウス
⑨ 西村釣り堀	⑩ 中澤商店
⑪ 潮原温泉	⑫ めがひらきのコセンター
⑬ 吉岡オート	⑭ 吉和サービスエリア上り線
⑮ 吉和せせらぎ園	⑯ めがひら温泉カフェ吉和
⑰ 吉和診療所	⑳ 吉和社会福祉協議会
⑱ 吉和支所	㉑ 吉和の未来を考える会
㉒ 廿日市市シティプロモーション室	

- ・ 本年度には、吉和支所、吉和社会福祉協議会、吉和未来を考える会や廿日市役所シティプロモーション室などと連携して、「大人からのアドバイス・支援」を積極的に取り入れた。生徒たちが考えていることが通用するかを確かめたり、廿日市市や吉和地域の大人と一緒に考えたりする場面を設定することで、生徒の実践的意欲の向上につなげている。

## 6 研究の成果と課題

### (1) 評価指標からの成果と課題

評価指標(効果を見取る目安)	R1 研究前	R2 1年目	R3 2年目
全国学力・学習状況調査の教科平均の通過率 60%以上の児童生徒の割合	76%	未調査	60%
CRT(標準学力検査) 全国平均以上の児童生徒の割合	89%	86%	3学期
CRTにおいて、全国平均を基準としたときの 通過率が上昇した児童生徒の割合	62%	66%	3学期
児童生徒アンケートで説明の場において自分の 考えをはっきりと表現できた児童生徒の割合	81%	未調査	87% 小31/33 中10/14

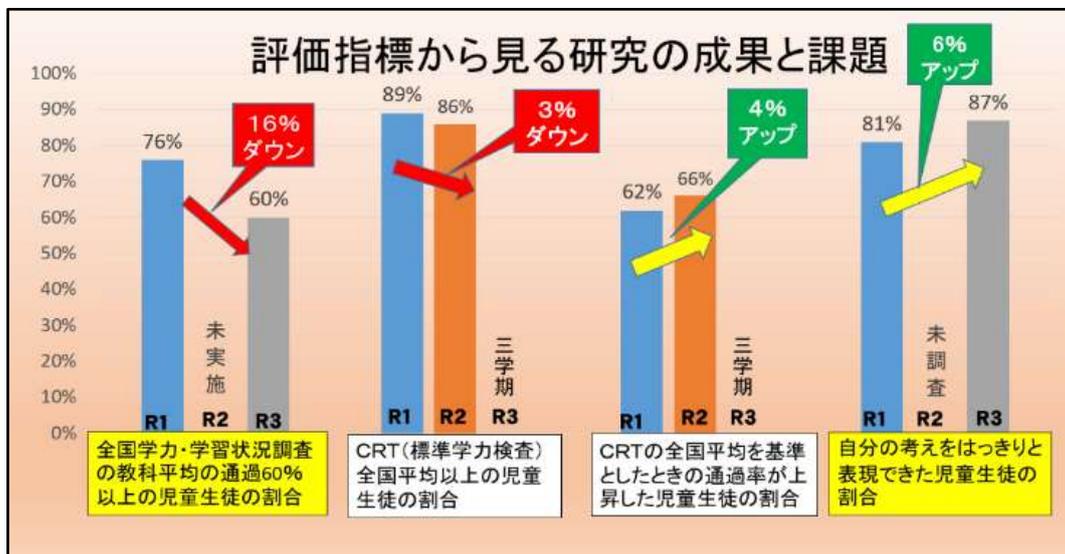
本研究は、令和2年度から始めたものだが、令和元年度、つまり、研究前の評価指標と研究2年目の途中である令和3年の評価指標を比較することで、研究の成果が見取れると考えた。

そこで、「説明力」が向上すると学力も必然的に向上すると考え、その見取りとして、まず、令和元年度と令和3年度（令和2年度は未実施）の「全国学力・学習状況調査の教科平均の通過率60%以上の児童生徒の割合」を比べてみることにした。

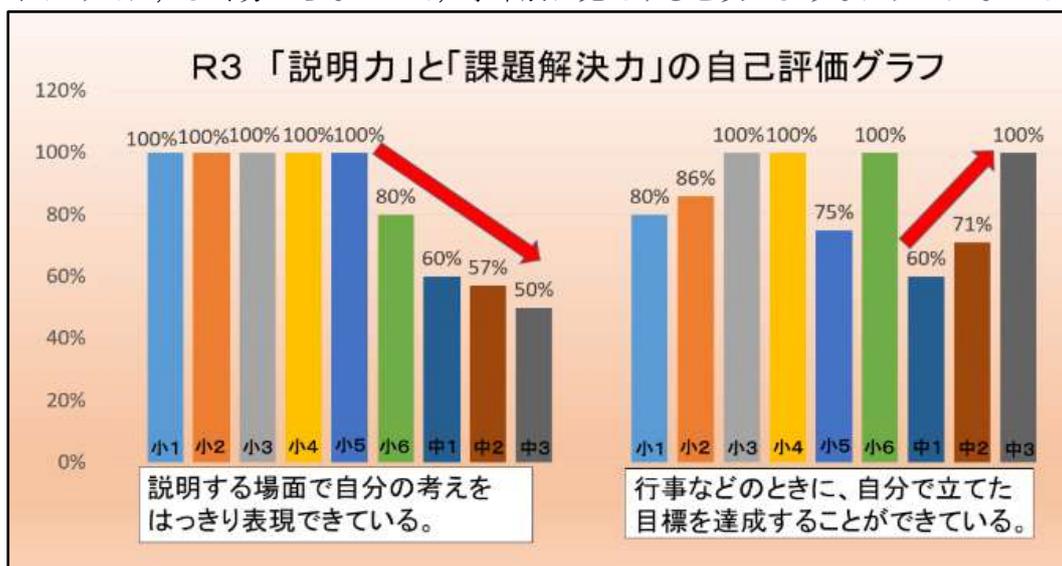
すると、76%から60%と16%も下がっている。また、個の変化が追える「CRT（標準学力調査、3学期に実施）」の「全国平均以上の児童生徒の割合」では89%から86%と3%下がっている。

一方、同じ「CRT」の別の指標では「全国平均を基準としたときの通過率が上昇した児童生徒の割合」では、62%から66%と4%上がっている。

次に、全校を対象に行った「児童生徒アンケート」の項目である「説明の場において自分の考えをはっきりと表現できた児童生徒の割合」では、81%から87%と6%上がっている。



これだけでは、よく分からないので、学年別に見てみると次のようなグラフになっている。



この表を見ると、「説明力」は、小6から下がっている。一方、「課題解決力」では、中1で一旦下がるが、中学生になると、学年が上がるにつれて上昇している。

これらについて考えると、まず、「説明力」に関しては、小学1年から5年生が100%ということから、限られた発表の場で、「自分の考えを言えたら、できた。」と判断していると考えられる。

それに対して、小学6年生以上になると、発言の機会が増えるだけでなく、内容の可否を問われることも多くなり、それに応じて、児童生徒自身の評価のレベルも高くなっているからだと考えられる。

また「課題解決力」を質問した項目では、中1、中2、中3と学年が上がるにつれて、達成感が高まっている。これは、中学校になって責任ある活動や取組が増える中で、学年が上がり、それに伴って経験も増して、様々な達成感を得る場面が増えていったと考えられる。

これらのことをまとめると、学力的には、全国との比較から見ればやや後退しているが、個々では若干の伸びが見られることがわかる。一方、「課題解決力」で見ると、この3年間で「中学校では学年が上がるにつれて、達成感が伸びている」ことがわかる。

以上のことから、この度の研究仮説による2年間の取組は、一定の成果があったと考えられる。

## (2) 研究内容別の成果と課題 (○成果 ●課題)

- ①「総合的な学習の時間を中心に据えたSDGsの視点による教育課程の見直し」について
  - 「吉和の未来を考える」をテーマに、SDGsの視点による教育課程の見直しに向けて、小学1・2年生の生活科と小学3年生から中学3年生までをいろいろなグループに分け、2年間の授業実践を行ったことで、来年度からの9か年を見通した総合的な学習の全体計画及び各教科の関連性が明確になった。
  - 児童生徒のSDGsによる地域づくりの意識が高まり、自分たちが発見した課題や提言を保護者や地域に発信することができた。また、異年齢での学習の場が生まれ、主体的な関わりや教え合い、学び合いを通して、人間関係をうまく形成することができた。
  - 「小学3・4年生と小学5・6年生が複式学級のため、隔年で教育課程や指導計画を考える必要があり小中一貫の9か年を見通して継続的・発展的に指導計画を改善していかなければならない。
- ②「全教科・全領域での説明力を高める指導方法の工夫」について
  - 「よしわ学びのサイクル」について意識統一し、「めあて」と「振り返り」が連動した授業を全教科・全領域で取り組むことで、児童生徒が、授業のキーワードを使って、自分の言葉で説明したりまとめたりできるようになってきた。
  - 「単元構想シート」を使った授業づくりに積極的に取り組むことで、指導と評価の一体化に基づいた授業を行い、児童生徒への学習に活かすことができた。
  - 児童生徒が発表する機会が増え、徐々に自信をつけてきており自己有用感が高まった。
  - 場面に応じた臨機応変な説明や応対ができる力や児童生徒の学力が十分向上していない。更なる説明力・学力の向上を図っていく継続的な取組が必要である。



この取組は、今始まったばかりのことで、2030年を迎えたときに、「8年前に小中学校で取り組んだから、今の吉和が良くなっているんだね。」という声が聞かれるように、できることから一つ一つ確実に取り組んでいきたい。そして、その時の吉和地域の担い手が、この2年間で学んだ児童生徒であれば、この研究の成果があったと言えるであろう。

そのためにも、教育課程や学習指導の全体計画や年間指導計画の土台をつくり、それに各教科の全体計画や年間指導計画を連動させて、年々継続・発展する取組を今後も行い、吉和地域の「持続可能なまちづくり」に少しでも貢献したいと考えている。

